

「ひとりでいたら、だめですか」

oomikiooo

はっきり言って、あたしは可愛い。
というか、可愛く見せるのがうまい。

中学を卒業する頃までは太っていて、にきびがひどかった。おでこからこめかみ、頬にかけて広がる赤いぶつぶつは、髪を無駄に伸ばし、うつむき加減で学校生活を過ごす大きな理由のひとつだった。当時、あたしはいわゆる「同人漫画」というのにハマっていて、深夜まで漫画を描いていたので、常に睡眠不足だったのだ。

卒業式の後、真っ白な寄せ書きのページと、顔の輪郭を髪の毛で隠し、どろんとした眼つきの自分が写った卒業アルバムを雑誌の束に紛れさせて、資源ごみに出した。描いていた同人誌の原稿も、何冊か出した同人誌も、そこに挟んで捨てた。

高校の始業式までの間で、規則正しい生活と、雑誌で読みかじった知識をもとに食生活を正したら、あっという間ににきびは薄くなった。カンペキに消えたとまではいかないが、ちょっとパウダーをはたけば目立たない程度になった。母親にお小遣いをねだって、少し遠くの街の美容室まで行った。雑誌を見て、予約の電話をするのには相当の勇気が要ったけど、漫画の原稿道具を捨てたときのことを思い出して、なんとかたどり着いた。

鏡の中に映った新しい自分を見て、嬉しくて仕方がなかった。
うっすら明るくした髪色に、軽く軽く梳いてもらった毛先、雑誌で見たとおり、きれいに斜めに流れる前髪。想像していた通りで、思わず笑顔になった。その自分の笑顔を見て、あれ、意外と悪くないじゃん、と思った。

その後、高校に入り、それまでの人間関係を一新した。
地元からは少し遠い私立高校で、それなりのお嬢様校だったので、遠方からの入学生も多く、何回か「高校デビュー」と指をさされたくらいで、うまく人生をスイッチできたと思った。

関わる人が変われば、自分も変わる。あたしはお化粧を覚え、ガリガリだった体つきを「スタイルいいね」と褒められることで自信がついてきた。ファッションやコスメの雑誌を買ってきて、隅から隅まで丹念に読んだ。1冊を10回以上読んで、今月の新作コスメや次のトレンドをソラで言えるようにし、もちろん実践した。周りから「リカちゃんって、おしゃれだよ」と声をかけられるようになり、雑誌やネットで仕入れた知識を披露するのが楽しかった。

コスメや洋服代欲しさにアルバイトを始めた。普通のファストフードのカウンター店員だ。そこで知り合った大学生の彼氏から常に「かわいい」と褒められ、気遣われ、自分は価値がある女なんだという自信がついた。同時に、人は見た目人間を判断するというのを痛感したし、一緒に居る人種であたし自身の評価も変わる、ということを知った。

順当に進学し、順当にそこそこの会社に入った。

仕事がめちゃくちゃ面白いかということそうでもない。でも、最低限の仕事をし、愛想を振りまき、見た目を磨いて、一緒に居る人種さえ間違えなければ、あたしもいわゆる「寿退社」のレールに乗ってすごろくで言えば「あがり」、いわゆる「幸せな人生」を送れるはず、と思っていた。

「人事のモリタさん、再来月で辞めるんだって」

ランチはいつも複数人で行く。ランチタイムは決まっていないけど、締め日以外はさほど忙しくないの、空氣的に「12時10分にはオフィスを出て5分ごろ帰ってきてから、歯磨きと化粧直しタイム」という暗黙の了解がある。だから12時を過ぎるとソワソワして、周りが「ランチ行こう」と言ったらすぐ出られるようにしなければいけない。12時から13時半の間は重要な仕事は入れない。ランチに乗り遅れることは、そのままグループ内で取り残されることになるからだ。

「モリタさんって、あの小柄で眼鏡かけた人？」

「そう、ちょっとファッションが独特っていうかさ」

「デスクに変なぬいぐるみ置いてあるよねー」

「いつも首になんか巻いてるしね、変なストールみたいなやつ」

モリタさんは、あたしが入社したときに担当してくれた先輩だ。マイペースっていうか天然っていうか、仕事はできるみたいだし人当たりは柔らかいけど、とにかく「変わり者」として陰ではちょっと有名だった。服装がどこで売ってるんだかよくわからないエスニックのスカートだったり、そう若くないはずなのに、リュックを背負って出社してくるような人。

でも、モリタさんにニコリと微笑みかけられると、なんとなく自分を肯定してもらえてるような気がして、あたしは嫌いじゃなかった。トコトコと歩いてきて、「おはよー」と言われると、思わず笑顔を返してしまうような人だった。

「あ、やばいもうランチ終わりじゃん。リカ、スタバ寄って帰ろうよ」

モリタさんについて思いをめぐらしている間に会社に戻る時間になってしまったようだ。あたしは半分近く残ったランチコーヒーに後ろ髪をひかれながら、みんなに続いてお店をあとにした。

コピー室で資料をまとめていると、モリタさんが現れた。うちの会社はコピー機とファックスが同じ機械になってるので、ファックスを取りに来たようだった。

「おつかれさまです、モリタさん」

「おつかれさまで一す」

今日もニコニコしながら、モリタさんはトレイに吐き出された用紙からファックスを各部署別を選び分けている。

「あの」

「は一いー？」

「モリタさん、辞めるって聞いたんですけど」

唐突かもしれないけど、思わず訊ねてしまった。

モリタさんは少しだけびっくりしたような顔をしたあと、またいつもの笑顔に戻って、「そうだよ」と言った。

「さすがオンナノコたちの情報網は、流れるのが早いねえ」

「辞めてどうするんですか、もしかして寿退社とか？」

「ううん、違うよお」

「じゃどうして」

自分でも不思議だったけれど、モリタさんが辞めてしまうのが寂しく感じられて、理由が知りたかった。

「わたしねえ、結婚してるのね。それで、仕事がひと段落ついたから、旦那のところに帰るんだあ」

「えっ、どういうことですか」

「いまはねえ、単身赴任でこっちにいて、旦那とは別に住んでたから、そっちに移るってことだよ」

びっくりした。

この、モリタさんが？今日もよくわからない柄のスカートをはいて、どこで買ったんですかっていう感じの靴をはいて、首にまだら色のストールをくるくる巻きつけている、モリタさんが？

「え、超びっくりなんですけど」

「あはは一、リカちゃん、おもしろいね。『超びっくりなんですけど』って」

「あ、ごめんなさい。でも、ほんとにびっくりしちゃって...」

なんで？こんな、ネイルも切りっぱなしの、ぼさぼさ髪の毛の、眼鏡にたぶんスッピンの人が旦那もちなんて。

「転勤でねえ、旦那だけ先に行ってもらって、わたしはこっちの仕事が一区切りついたら合流するっていう条件で、残してもらったんだよね。で、人事部もスタッフ層が厚くなってきたし、もういいかなあって」

ガーッ。ガーッ。と、コピー機がプリンタ用紙を吐き出している。あたしの頭からは何も出てこない。

自分が辞めたあとの会社のことなんて、考えてみたこともなかった。あたしが抜けても、誰かがどうにかするだろう、くらいの気持ちでいたから、モリタさんの発言は目からウロコだった。

「もうちょっと、もうちょっとと思ったら4年も経っちゃってねえ。旦那と久しぶりに一緒に暮らせるから、楽しみなんだあ」

「え、てことはモリタさんていくつなんですか」

「36だよー」

「ありえなくないですか、そのトシでその肌とか！」

「あははー、リカちゃんておもしろいねー」

「いやでも、ぜんぜん、あたしより10歳も年上とか見えない、ぜんぜん」

失礼な物言いだったかもしれないのに、モリタさんはニコニコして、「はい、これ経理部あてのファックスね。届けておいてくださいな」と紙の束をあたしに渡しながら言った。

「自分がいなくなっても、自分を育ててくれた会社は大切な場所だからねー。立つ鳥あとを濁さず、ってやつ？」

わたしが辞める前に一度くらいはランチ行こうね、と言い残して、モリタさんはコピー室を去っていった。

ガーッ。ガーッ。吐き出され続けるプリンタ用紙。あたしの頭からは何も出てこなかった。

次の日の朝、なんとなくいつもより早く目が覚めてしまって、1時間も早くに会社に着いた。

経理部はまだ誰も来ていないので、一角の電気をつけた。自分の席に座ると、デスク周りが散らかっていることに気付いて、なんとなく片付け始めた。そういえば、モリタさんのデスクはいつもきれいだった。変なぬいぐるみとか置いてあって、よくみるとマウスパッドがよくわかんない柄だったりしたけど、そういうのも含めて、モリタさんらしい雰囲気でした。

30分も片付けると、デスク周りがすっきりした。資料もいらぬものは捨て、いるものはファイリングしてみた。なんだかちょっと仕事ができる人になったような気がして、後回しにしていた資料に手をつけることにした。いつもなら、空き時間にはすぐネットサーフィンしてたけど、なんとなくそういう気分だったのだ。

ちらほら他の社員が出勤し始める頃、あたしは絶好調になっていた。自分の資料を片付けていたら、会社の共有フォルダやファイル棚も整理したくなってきて、こういうルールで整理してもいいか、と部長に許可を貰いにいった。

あちこちに散らばっていたファイルや、名前の付け方がバラバラだったフォルダ名を揃え、先輩の残したマニュアル資料にも手を入れ、新しい情報を追加した。モリタさんが言っていた「立つ鳥あとを濁さず」が頭にひっかかっていたんだと思う。あたしじゃない人が見ても分かるように、すぐに作業できるように、と思いながら整理した。

同人誌を作っていた頃のことを思い出していた。シナリオを考え、漫画を描いて、台割を決めたら印刷会社に持ち込む。真似事だったことに変わりはないが、当時は精一杯いろいろなことを考えて、スムーズに物事が進むように試行錯誤していた。資料整理をしながら、そのときのことを思い出した。同じだった。サークル仲間が、印刷会社の人を、勘違いしないように、分かりやすいように、物事を考えて整理する。そうか、同じことだったのか。

気がついたら12時を過ぎていて、資料室にいたあたしはランチに行き遅れた。慌てて席に戻り、財布とランチ用のミニバッグを取ってエレベーターホールに向かう。まだみんな近くにいるかもしれない。

廊下からエレベーターホールへ繋がる曲がり角で、反響した声が聞こえてきて、あたしたち立ち止まった。よかった、みんなの声だ。間に合ったのかな。

「...リカ、結局どこ行ったんだろね」

「知らない。なんか今朝から張り切ってたし、いいんじゃない？」

「急になんなんだろうね、朝から気合入っちゃってさ、意味不明」

「あたし仕事ガンバッテマス！みたいなアピール、正直うざいよね」

「いーよもう、別に。エレベーター来るし、乗ろう。今日どこ行く？」

その場で立ちすくんでしまい、あたしは結局エレベーターに乗り遅れた。トイレに行ってから少し時間をつぶし、コンビニでお弁当を買って、休憩室へ向かった。外に出て、みんなと会うのが嫌だったし、一人でランチしてるところなんて、見られたくなかった。

休憩室に入ると、モリタさんがお弁当を食べていた。自分で作ったやつみたいで、変な柄のきんちゃくが置いてあった。お弁当の具も全体的に茶色っぽかったけど、おいしそうに見えた。

「あれー、リカちゃんだあ。おつかれさまあ」

モリタさんはにっこり笑って手を小さく振ってくれた。「お茶、のむ？」といって、給茶機から、たいして美味しくはないけど、よく冷えたお茶を汲んできてくれた。

「お弁当なんだ？どうしたのー、ひとりでなんて、珍しいね」

一緒に食べよう一、と言ってモリタさんはあたしの隣に座ってくれた。お弁当入れのきんちゃくの柄をよく見たら、仮面ライダーのプリントだった。仮面ライダーで。

「ひとりでいたら、だめですか」

思わず涙がこぼれてしまった。

なんなんだこの人。いいトシして、旦那もいるのに、変な服着て、変な靴はいて、変な柄のお弁当入れなんて持って。周りのことなんて、まるで気にしてなくて、でもニコニコして、幸せそうで。

「えっ！ごめん、だめじゃないよ！」

モリタさんはびっくりして、お詫びのつもりなのか、小さい方のタッパを開いて、皮を耳の形に残し、ウサギ型にむいたリンゴを1つわけてくれた。ウサギ型で。

「ごめんごめん、そういうときもあるよね。でも、リカちゃんて、そういう方が好きなのかなって思ってたから」

リンゴをかじったら、薄く塩味がした。お母さんが作ってくれた、お弁当に入ってたリンゴと同じ味。しょっぱい味が、なつかしい、と思ったら中学校時代のことが思い出されてきて、涙がまたぼろぼろと出た。あの頃と同じだ。また、ひとりになるのかな。でも。

「...好きじゃないです。ぜんぜん、好きじゃない。髪の毛巻いたり、ネイルサロンに行ったり、アネキャン読んだりするのが楽しくないわけじゃないんですけど、好きじゃないです。あたしが好きなのは...」

モリタさんみたいに、周りから見たら変なものでも、自分が好きなら好き、と言えるような人だ。白い目で見られても、教室で浮いても、自分の好きなお話を考えて、へたくそでも絵を描いて、それを同じように好きな誰かに届けることだ。

モリタさんは心配そうにこちらを見ている。真剣に話を聞こうとしていてくれるのが分かる。顔が、というか表情が、なんとなく柴犬に似てるな、と思った。

「...モリタさん、漫画とか好きですか」

「大好きだよ！」

「食い気味に返事しましたね...」

「うん、だってもう大好きだもん！リカちゃんも漫画とか読むの？最近なに読んだ？」

わたしねえ、いまこれ読んでるの、面白いんだよ一、とモリタさんはまた変な形のリュックから単行本を出してきて、身を乗り出し、カバーを外して表紙を見せてくれて、あれこれと語り始めた。ニコニコして、楽しそうに。

「モリタさん、あたし、モリタさんと漫画の話がしたいです」

「えっ」

「あたし中学生の頃、同人誌とかやってたんです。しばらく、描くの休んでたんですけど」

「ええ——っ！！」

今度はモリタさんが飛び上がるほど驚く番だった。